

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13946

研究課題名(和文) 若年者自殺対策のための傍観者心理解析と支援行動促進プログラム作成

研究課題名(英文) Psychological analysis of bystanders for suicide prevention in young people and development of a program to promote supportive behavior

研究代表者

大塚 尚 (OTSUKA, Hisashi)

東京大学・相談支援研究開発センター・助教

研究者番号：60735075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は青年の自殺対策を目的に3つの調査を行った。調査1では独自に作成した質問紙を青年学生に実施し、現代青年の希死念慮経験や周囲の希死念慮への反応と対応の特徴、傍観者心理の実態を明らかにした。調査2では質問紙調査を全国の青年に拡大し、傍観者心理への影響因と支援行動促進要因を検証した。結果として、傍観者心理には個人の経験や態度が関係しており、支援行動の喚起には情動的な反応が重要であることを明らかにした。この結果を受け、調査3では心理的危機を経験した青年へのアートグループを実施し、表現行為による心理的変容やその過程を他者と共有することの意義、表現作品が周囲の支援行動を引き出す可能性を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在日本国内では若年層の自殺が減少していない状態が続いており、対策が急務である。本研究は現代の青年にとっての有効な自殺対策を検討することを目的に、これまで十分に調査されてこなかった青年の「本気で自殺したいと思った」経験の実態、青年が周囲の「死にたい」という声に示す反応や対応の特徴、周囲の危機への傍観者心理の傾向を明らかにした。そして、青年の自殺を防ぐためには知識の普及や予防教育だけでは不十分であり、危機的な状態にある人の心模様を体感的に知り、情感を伴った支援意識を促進することが重要なことを示した。これらの結果と取り組みは、今後の日本の青年の自殺対策に寄与しうるものと言える。

研究成果の概要(英文)：This study conducted three surveys for the suicide prevention in Japanese adolescents. In Survey 1, original questionnaires were administered to students to investigate their experiences with suicidal thoughts, the characteristics of their reactions and responses to suicidal ones, and the reality of being on the sidelines of others' crises. Survey 2 extended the questionnaires to adolescents across the country to examine factors influencing bystander's state and promoting supportive behavior. The results revealed that bystander psychological state is related to personal experiences and attitudes toward suicide, and that emotional responses are important in evoking supportive behavior. In response to these, Study 3 conducted an art group with adolescents who had experienced a psychological crisis to examine their psychological transition through the expression, the significance of sharing the process with others, and the possibility of their work eliciting others' supportive behaviors.

研究分野：臨床心理学

キーワード：青年 自殺対策 傍観者心理 支援行動 アート表現 情動 共有

1. 研究開始当初の背景

近年日本では若年者の自殺対策が急務である。先進国の中でも日本の青年の自殺死亡率は高く、国内でも他の世代の自殺死亡率が減少している中、若年層だけが減少していない状態が続いている。そして、自殺を含む危機的な状況において、青年の心理的な傾向としては専門家ではなく身近な人を求める傾向が強いことが知られている。しかしながら、大塚・穴水(2018)の調査から、実際には希死念慮を抱える青年が周囲に助けを求められずに孤立しがちであることや、青年の「死にたい」という声に対して傍観的になってしまう人が一定数存在することが明らかとなった。そこで本研究では、いかにして危機的な状態にある青年自身の心理的な孤立を防ぎ、周囲の人の傍観的心理を減じて主体的な支援行動を喚起できるか、という点に着目し、現在の青年の自殺対策に必要な視点を検証した。

2. 研究の目的

本研究では、3つの調査によって以下を明らかにすることを目的とした。

(1) 現代青年の希死念慮経験や傍観者心理の分析(調査1)

全国の青年学生を対象とした質問紙調査から、現代の青年の深刻な希死念慮の経験、周囲の希死念慮との関わりの経験、自殺予防教育受講経験、周囲の希死念慮に対する反応と対応の傾向、傍観的心理状態の実態などを明らかにする。

(2) 周囲の青年の希死念慮への傍観者心理に影響を及ぼす要因の検証(調査2)

全国の一般青年を対象とした質問紙調査を実施し、自他の希死念慮の経験や自殺への態度など、周囲の希死念慮に対する傍観者心理に影響を及ぼす要因を明らかにする。加えて周囲の青年の主体的な支援行動を促進するために重要な要因を明らかにする。

(3) 支援行動促進プログラム作成のためのパイロットスタディ(調査3)

希死念慮等の心理的な危機を経験した青年が、その体験や今の内的世界をアートで表現するプログラムを実施し、アート表現が制作者の精神的健康や心理的成長に及ぼす効果を検証する。さらに、その表現作品を第三者の青年が鑑賞した際の、鑑賞者の感情体験や自殺予防への意識変容などの影響を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 調査1

調査協力者

調査1では直接配布とweb調査による質問紙調査を行った。直接配布はX大学に在学中の大学生38名から回答を得た(男性:17名,女性:21名,平均年齢 21.89 ± 1.56 歳)。web調査は全国5つの政令指定都市に在住の18歳から29歳の青年学生(高校生は除く)を対象とし、188名(大学生・大学院生:168名,短大生・高専生:5名,専門学校生・その他学生:15名,男性:89名,女性:98名,その他:1名,平均年齢 21.08 ± 2.08 歳)から回答を得た。

尺度

調査1では以下の尺度を使用した。

・周囲の希死念慮への反応尺度(以下,反応尺度):周囲の人の希死念慮に気付いた時に生じる感情・思考・気持ちなどの反応を捉えるために独自に作成した22項目の尺度(大塚ら,2018)を用いた。

・周囲の希死念慮への対応尺度(以下,対応尺度):周囲の人の希死念慮を知った時に自分が取りうる対応について、一般的に見られる対応やあまり望ましくない対応など14項目から捉える尺度(大塚ら,2018)を用いた。

・自殺の態度尺度:青年の自殺に対する態度を測るためにAttitude Toward Suicide 日本語版(Kodaka et al., 2013; 以下,ATTS-J)を使用した。

・希死念慮等の経験:自身の経験として、これまで本気で自殺を考えた経験、周囲の希死念慮と関わった経験、自殺予防教育・研修の受講経験の有無について回答を求めた。

手続き

直接配布は大学の講義等の空き時間を利用して直接配布し回収した。回答のしやすさを考慮して、質問紙の構成は説明文書、反応尺度、対応尺度、ATTS-J、属性(年齢、性別、学籍)、これまでの自身の経験の順で提示し、最後に自由記述欄を設けた。

web調査(Cross Marketing社利用)では調査対象外となる条件を自動的に除外するため、属性(年齢、職業、性別、居住地)を最初に尋ねた。そして条件に合致する回答者のみ質問紙に進むことができる形式とし、説明文書、反応尺度、対応尺度、ATTS-J、これまでの自身の経験の順に提示し、最後に自由記述欄を設けた。

なお、調査は2018年10月から11月に実施した。

倫理的配慮

本研究は東京大学倫理審査専門委員会の承認を得て実施した。調査内容には希死念慮や自殺に関する内容を含むため、説明文書でその旨を明示し、同意が得られる場合のみ無記名で回答を得た。また調査協力によって心身の不調をきたした際に備えて、直接配布の調査では精神科専門医の支援を受けられる体制を予め整えた上で研究代表者の連絡先を明示し、web調査では調査の最後に公的機関や民間団体の相談窓口の情報を提供した。

(2) 調査 2

調査協力者

全国の 18 歳から 29 歳の青年 556 名（男性 274 名，女性 278 名，その他の性別 4 名；平均年齢 ± SD: 24.98 ± 3.16 歳）。調査に先立ち，居住地による偏りが出ないことと，職業は国内の職業分布に沿った割合となることを調査会社に依頼した。なお，高校生や外国籍の人は除外した。

尺度

調査 1 と同様に，周囲の希死念慮への反応尺度，対応尺度，ATTS-J，希死念慮等の経験に関する質問を実施した。

手続き

本調査は web 調査（Cross Marketing 社利用）を実施した。調査手続きは調査 1 に準拠し，2019 年 1 月から 2 月に実施した。

倫理的配慮

本研究は東京大学倫理審査専門委員会の審査と承認を得て実施した。調査内容には希死念慮や自殺に関する内容を含むため，説明文書でその旨を明示し，同意が得られる場合のみ無記名で回答を得た。また調査の最後に公的機関や民間団体の相談窓口の情報を提供した。

(3) 調査 3

調査協力者

Y 大学の学生相談機関を利用している青年 5 名。これまでに希死念慮経験を有し，現在は自殺行動の恐れがなく状態が安定していること，精神科的に重篤な症状がみられないこと，数回にわたるワークに継続的に参加できる見込みがあること，主治医や学生相談機関の長の許可が得られることなどを条件に対象者を選定した。事前に全員に BDI-ベック抑うつ質問票と事前面接を行い，本人の意思確認と安全面の査定を行った。

手続き

参加者の表現を引き出すために，美術作家 1 名を講師に招き，複数回のクローズドなグループを実施した。グループ 1 回の時間は 4 時間程度で，毎回臨床心理士 2 名が参与観察した。美術作家の助言指導のもと，各自が表現したいテーマや偶発的に出てきたものを自由に表現してもらったこととした。毎回作成後は全員で作品を鑑賞し感想を話し合い，芸術療法体験尺度（SEAT-R；加藤ら，2014）と自由記述で体験の振り返りを行った。なお，自殺等に関するテーマについてはグループ内では特に話題に挙げず，毎回の自由記述で思うことや感じることを書いてもらった。実施期間は 2019 年 12 月から 2020 年 3 月であり，各回の概要は以下に示す通りである。

#1（アニメーション表現）：自分で描いた自由画を背景に 2 つのコマを自由に配置し，8 カットで動きや関係性を表現するアニメーションを作成した。

#2（写真表現）：沢山の表現の中から出てきた自分の表現や偶発性に触れるために「1 時間で 100 回シャッターを切る」ワークを行った。

#3（写真をもとにした絵画表現）：自身が撮った写真から任意の 1 枚を選び，それを全く異なる 3 つの描き方で表現する絵画表現を行った。

#4（自画像制作）：一人ひとりが木版にかわや専用の塗料を塗って描くための土台を作成した後，自分を映し出していると感じられるものを自由に描くワークを実施した。

#5（最終回）：COVID-19 の影響で延期となった。

倫理的配慮

不調の発生を防ぐため，参加時は主治医等の許可を条件とした。参加者には調査概要と自殺に関する内容を含むことを予め文書で説明し同意を得た。また不調発生に備え，学内外の医療機関で支援を受けられる態勢を整えた。なお本調査は，東京大学倫理審査専門委員会の承認を受けた。

4. 研究成果

(1) 調査 1

「本気で自殺を考えた」経験がある青年は 23% であり，その内の約 3 割が直近 1 年に深刻な希死念慮を経験していることが分かった。しかしながら，周囲で希死念慮がある人との関わりは 8 割強の学生は経験しておらず，自殺予防教育や研修の経験がない青年も 77% に及びことが明らかとなった（表 1）。このことから，青年の間で今も深刻な希死念慮を感じている人が周囲にいる可能性は高いものの，希死念慮を抱える人と周囲の青年の間

表1 希死念慮その他の経験への回答

	経験あり		経験なし	
	人数	(%)	人数	(%)
これまでの希死念慮	52	(23.01%)	173	(76.55%)
└ 直近1年の希死念慮	18	(34.62%)	34	(65.38%)
周囲の希死念慮との関わり	43	(19.03%)	183	(80.97%)
自殺予防教育・研修受講	52	(23.01%)	173	(76.55%)

に何らかの開きがあり，周囲から孤立して深刻な希死念慮を募らせている青年は少なくないことが示唆された。また，近年の日本の自殺対策では年齢の早い段階から SOS の出し方教育を取り入れる方針を示しているが，現在成人している学生はそういった機会を十分に得られないままの状態であることが示された。これは若年者の自殺対策を考える上で看過できない問題であり，今後青年に対する自殺予防教育や研修の機会を設けることが重要となってくると考えられる。

また，周囲の希死念慮を知った時に，「何も感じない」とした人が 22% 存在していたものの，「心配になる」「驚く」「力になりたいと思う」「動揺する」などの何かしらの心理的反応を生じ

る青年も半数以上に上ることが明らかとなった。しかしながら、周囲の希死念慮を知った時に、「特に何もしない」と回答した人は4割強に上り、相談窓口の紹介や関係者間での情報共有といった対応を取らないと回答した青年も4割以上に上ることが明らかとなった。このことから、青年の一定数が周囲の希死念慮に傍観的な状態を示しうると考えられる。

さらに、希死念慮を経験している人の方が、自殺に対して容認的な態度を取ったり、自殺が誰にでも生じるものであると捉えたりする傾向にあり、反対に希死念慮経験がない人の方が自殺は正当化されるべきではないという態度を示す傾向にあることが明らかとなった。このような態度の違いが見えない壁となり、希死念慮を持つ人が希死念慮を経験していない周囲の人に対して苦悩を吐露しにくくさせ、心理的孤立を生じやすくしている可能性が示唆された。

また、本調査で実施した尺度の因子分析を行った結果、反応尺度は「感情の揺れ動き」「関わりの不安」「軽視・傍観」「共感・同一視」の4因子構造、対応尺度は「他者連携」「関与-回避」「説得・励まし」の3因子構造として一定の構成概念妥当性と内的整合性が確認できた。これをもとにいくつかの群間比較を行った結果、希死念慮経験者の方が周囲の希死念慮に共感や同一視といった反応を示すのに対して、希死念慮を経験していない人は相手と関わることに不安を感じたり、本気じゃないだろうと軽視して傍観したりする傾向にあることが分かった。

本調査の結果から、周囲の希死念慮に対して傍観的心理状態になる人が一定数存在することや、希死念慮を抱える人とその周囲の人との間には見えない隔たりのようなものがある可能性が示唆された。そして、青年の自殺対策においては、一人で死を思う青年が孤立してしまう状況をどのように変えていけるかが重要であり、そのためには周囲で心配になりながらも傍観してしまう人から主体的な支援を引き出すための取り組みが重要であることが確認された。

なお、本調査の結果は大塚ら(2018)で公表した。

(2) 調査2

個人の属性や様々な経験、自殺への態度、周囲の希死念慮への反応が実際の対応に与える影響を検討するため重回帰分析を行ったところ、対応尺度の「他者連携」では、 R^2 は.55であり0.1%水準で有意であった($F(14, 537)=46.52$)(表2)。標準偏回帰係数を見ると、自殺の態度の「予防・援助可能性」($\beta = .31, p < .001$)、反応の「感情の揺れ動き」($\beta = .44, p < .001$)と「関わりの不安」($\beta = .20, p < .001$)が有意な正の関連を示し、反応の「軽視・傍観」($\beta = -.12, p < .01$)が有意な負の関連を示した。

「関与-回避」では、 R^2 は.44であり0.1%水準で有意であった($F(14, 537)=30.30$)(表3)。標準偏回帰係数を見ると、他者の希死念慮との「関わり経験」($\beta = .09, p < .01$)、自殺の態度の「予防・援助可能性」($\beta = .19, p < .001$)、反応の「感情の揺れ動き」($\beta = .55, p < .001$)が有意な正の関連を示し、「性別」($\beta = -.13, p < .001$)、自殺の態度の「自殺の非正当性」($\beta = -.09, p < .05$)、反応の「関わりの不安」($\beta = -.23, p < .001$)と「軽視・傍観」($\beta = -.14, p < .01$)が有意な負の関連を示した。

重回帰分析の結果から、周囲の希死念慮を知った際に傍観状態から脱して何らかの対応を生起するためには、他の要因以上に「心配だ」「力になりたい」などの感情の揺れ動きが重要であることが示唆された。これは、周囲の危機に対して知的な理解をするだけでは主体的な支援行動に結びつかず、情動体験を伴う理解が重要であることを示している。これに次いで、自殺は予防や援助をすることができないという態度を有することや、「本気ではないだろう」などと軽視するような反応も傍観状態を引き起こすことが明らかとなった。

また、本調査から、希死念慮を抱える相手への不安が強くなると積極的に本人と関わることは避けやすくなることが示唆された。そのため、自殺予防教育や研修の機会においては、誰でも不安を持ちうることについての心理教育や、専門家へのコンサルテーションの勧奨を行うなど、援助者の不安のセルフマネジメントを高めるような工夫も重要となってくると言える。

さらに、周囲の人には日ごろから自殺は予防援助可能なものであるという心構えを持ってもらうことが重要と考えられる。本調査に参加した青年の8割以上が自殺予防教育を受講したことがなかったことを考えると、現状理解や知識獲得の場を設け、その中で他人事や軽視すべきものではなく関わ

表2 「他者連携」の重回帰分析結果

	B	SE B	β
属性・性別	-0.06	0.05	-0.04
経験・希死念慮経験	0.05	0.06	0.03
関わり経験	0.00	0.07	0.00
受講経験	0.06	0.07	0.03
自殺の容認	-0.04	0.04	-0.04
自殺の一般性	0.04	0.05	0.04
自殺への態度・自殺表明への解釈	0.02	0.03	0.02
自殺の非正当性	-0.02	0.03	-0.02
予防・援助可能性	0.35	0.04	0.31***
衝動性	0.00	0.04	0.00
感情の揺れ動き	0.42	0.04	0.44***
希死念慮への反応・関わりの不安	0.24	0.05	0.20***
軽視・傍観	-0.12	0.04	-0.12**
共感・同一視	0.03	0.04	0.03
R^2	0.55		
調整済み R^2	0.54		
F	46.52***		

** $p < .01$, *** $p < .001$

表3 「関与-回避」の重回帰分析結果

	B	SE B	β
属性・性別	-0.19	0.05	-0.13***
経験・希死念慮経験	-0.05	0.07	-0.03
関わり経験	0.18	0.07	0.09**
受講経験	-0.02	0.07	-0.01
自殺の容認	-0.04	0.04	-0.04
自殺の一般性	0.04	0.05	0.04
自殺への態度・自殺表明への解釈	0.01	0.03	0.01
自殺の非正当性	-0.07	0.03	-0.09*
予防・援助可能性	0.20	0.04	0.19***
衝動性	0.04	0.04	0.03
感情の揺れ動き	0.48	0.04	0.55***
希死念慮への反応・関わりの不安	-0.26	0.05	-0.23***
軽視・傍観	-0.14	0.04	-0.14**
共感・同一視	0.03	0.04	0.04
R^2	0.44		
調整済み R^2	0.43		
F	30.30***		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

りうるものであるという意識や態度を持ってもらうことが、主体的な支援行動を引き出すために重要であることが示された。

なお、本調査の結果は国内外の学術誌で公表した (Otsuka et al., 2020; 大塚, 2019)。

(3) 調査 3

最終回が COVID-19 の影響で延期となってしまったことにより、当初予定していた一連のグループ参加による参加者本人の希死念慮や危機的体験に対する変容過程の検証や、表現作品を第三者に提示することによる鑑賞者の意識変容の検討などは、本報告書作成時点では実施できないままとなっている。そのため、本報告書ではグループ全体の概要と初期の過程のみを記載する。

グループ開始初期はお互いに様子を見て緊張した中での始まりであったが、回を重ねるごとに参加者それぞれが主体的に自分なりのテーマや内的世界を表現するようになっていった。また、参加者同士がお互いの表現を尊重し、相手の世界を脅かさないようにしながらも、お互いの作品に対して自由に発言するような温かい交流が生まれた。そして、参加者やスタッフのそれぞれがグループの場そのものに対して馴染みを感じるようになっていった。

初期の 2 回を比較した結果、#1 はグループ全体で緊張感があり、参加者の作品としても 2 つのコマが交わらずに一定の距離を保つ表現が多く見られた。その中でも各自思いがけない個性が現れ、それを自身で感じ取り、かつお互いに批判せず尊重する様子が見られた。#2 では緊張感が緩んだ参加者が多く、「鬱だった時の世界の見え方」など、より独自の表現が見られた。作成後も主体的に感想を話し合うことが増え、振り返り時の評価尺度 (SEAT-R) においても気持ちの解放・安定や自己理解が進んだことが示された (図 1)。また、自分にとっての自我異和的な夢のイメージを表現した参加者 A は、参加後に「自己否定が減った」と感じ、幼少期から続く希死念慮に対し「自分は死にたい訳ではなかった。死を何よりも恐れていた」と気づきを語った。

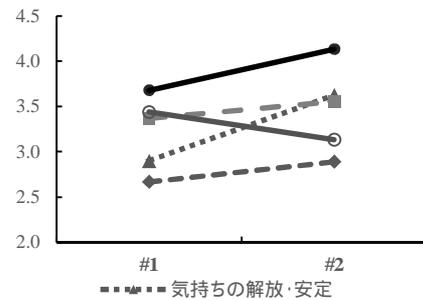


図1 グループ参加による体験の変化

本調査から、希死念慮等を含む自分の体験世界をアート表現によって外在化し、それが他者との間で共有され受け止められることで、気持ちの安定や自己理解が深まることが示唆された。そして、自殺に関するテーマを直接的に表現していない中でも、表現を通して自身の受け入れがたい要素と向き合うことで、思いがけない自己受容や希死念慮の変容が生じることが示された。自殺予防と言うと、死を防ぐという側面に目が向きがちであるが、一人ひとりには生の物語や世界があり、それらに丁寧に触れることで死への思いの変容を図っていくという視点は重要と考えられる。

今後は延期となったグループを実施し、アート表現が心理的危機体験の変容に及ぼす影響やその作品が第三者の感情体験等に与える影響を検証していくことを予定している。なお、本調査の一部は国内学会で公表した (大塚ら, 2020)。

< 引用文献 >

- 加藤大樹, 今村友木子, 仁里文美 (2014). 芸術療法体験尺度の改訂. 金城学院大学論集 人文科学編, 11(1), 1-6.
- Kodaka, M., Inagaki, M., Postuvan, V., Yamada, M. (2013). Exploration of factors associated with social worker attitudes toward suicide. *International Journal of Social Psychiatry*, 59, 452-459.
- 大塚尚・穴水幸子 (2018). 主観的体験から探る現代の大学生の「生きづらさ」の実態. *心理臨床学研究* 36(2), 166-177.
- 大塚尚, 穴水幸子, 勝又陽太郎, 榎本真理子, 藤原祥子, 伊藤理紗, 古川真由美, 杉岡正典, 高野明 (2018). 現代の学生が経験する自他の希死念慮に関する基礎調査. *東京大学学生相談所紀要*, 26, 7-15.
- 大塚尚 (2019). 周囲の「死にたい」に青年は何を感じどう動くか? 傍観状態の影響因を探る. *東京大学学生相談所紀要*, 27, 7-14.
- Otsuka, H., Anamizu, S., Fujiwara, S., Ito, R., Enomoto, M., Furukawa, M., Takano, A. (2020). Japanese young adults' attitudes toward suicide and its influencing factors. *Asian Journal of Psychiatry*, 47, 101831.
- 大塚尚, 古川真由美, 藤原祥子, 榎本真理子, 伊藤理紗, 高野明 (2020). 心理的危機経験者へのアート表現グループの試み 自由に表現することの土台作りの観点から. *日本学生相談学会第 38 回大会発表論文集*, 46.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大塚尚, 穴水幸子	4. 巻 36
2. 論文標題 主観的体験から探る現代の大学生の「生きづらさ」の実態	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 166-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大塚尚, 穴水幸子, 勝又陽太郎, 榎本眞理子, 藤原祥子, 伊藤理紗, 古川真由美, 杉岡正典, 高野明	4. 巻 26
2. 論文標題 現代の青年が経験する自他の希死念慮に関する基礎調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学学生相談所紀要	6. 最初と最後の頁 7-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Otsuka Hisashi, Anamizu Sachiko	4. 巻 43
2. 論文標題 Japanese university students' difficulty in living and its association with suicidal ideation	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian Journal of Psychiatry	6. 最初と最後の頁 50-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1016/j.ajp.2019.05.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大塚尚	4. 巻 27
2. 論文標題 周囲の「死にたい」に青年は何を感じどう動くか? 傍観状態の影響因を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学学生相談所紀要	6. 最初と最後の頁 7-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Otsuka Hisashi, Anamizu Sachiko, Fujiwara Shoko, Ito Risa, Enomoto Mariko, Furukawa Mayumi, Takano Akira	4. 巻 47
2. 論文標題 Japanese young adults' attitudes toward suicide and its influencing factors	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asian Journal of Psychiatry	6. 最初と最後の頁 101831
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1016/j.ajp.2019.10.011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大塚尚, 古川真由美, 藤原祥子, 榎本真理子, 伊藤理紗, 高野明
2. 発表標題 心理的危機経験者へのアート表現グループの試み 自由に表現することの土台作りの観点から
3. 学会等名 日本学生相談学会第38回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	穴水 幸子 (Anamizu Sachiko)		
研究協力者	古川 真由美 (Furukawa Mayumi)		
研究協力者	蓮沼 昌宏 (Hasunuma Masahiro)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤原 祥子 (Fujiwara Shoko)		
研究協力者	伊藤 理紗 (Ito Risa)		
研究協力者	榎本 真理子 (Enomoto Mariko)		
研究協力者	勝又 陽太郎 (Katsumata Yotaro)		
研究協力者	杉岡 正典 (Sugioka Masanori)		
研究協力者	高野 明 (Takano Akira)		